

第4節 気・血・津液の相互関係

気・血・津液は、いずれも人体を構成する基本物質であり、生命活動を維持するために欠かすことのできないものである。それぞれに固有の性質と機能があり違いはあるが、生理機能を発揮する上で、お互いに依存し、制約し、利用し合っている。そのため気・血・津液は、病的な状態においても相互に影響をおよぼし合いやすい。

1. 気と血の関係

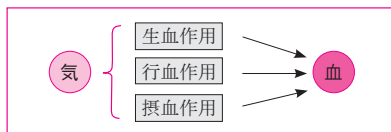
気は動・温煦を主るので陽に属し、血は静・濡潤を主るので陰に属する。『難経』二十二難では、気と血の機能の違いを簡潔に「気は温煦を主り、血は濡潤を主る」と述べている。

一方、気と血の間には密接な関係があり、「気は血の帥、血は気の母」とされる。

1. 気の血に対する作用

…… 気は血の帥

気には、血を生み(生血)、血をめぐらせ(行血)、血を制御する(摂血)作用がある。血に対する気のような働きが、まるで気が血の統率者のようなことから、「気は血の帥」とされる。



1 気は血を生じる(生血)

血の生成には、気そのものと気の運動変化すなわち気化作用が必要である。血の構成成分である営気と津液は、いずれも脾胃の運化によって得られる水穀の精気から作られるが、飲食物が水穀の精気となった後、営気と津液になり、赤く変化して血となる過程に、気の気化作用が関与している。

気が旺盛であれば血を生み出す働きも盛んであるが、気が衰弱すれば血を生み出す働きも弱まり、著しい場合は血虚に陥る。臨床において血虚の治療を行う際、よく気を補う方法を併用するが、これは気が血を生じるという理論を応用したものである。

【例】当帰補血湯(黄耆、当帰)

気の生血作用を応用した方剤に当帰補血湯がある。大量に配合される黄耆は、補気することで血の化生を促進する。本剤は補気生血の効能をもつ代表的方剤である。

2 気は血をめぐらせる(行血)

血は陰に属し静を主る。よって血は単独では運行することができない。血の運行には気の推动作用が必要である。気がめぐれば血もめぐる。気の流れが滞れば血の流れも滞る。気虚や気滞では、しばしば血行が停滞して血瘀が形成され、著しい場合には脈絡が阻まれて瘀血となる。気機が逆乱すれば、気の昇降出入の異常に伴って血も逆乱する。気とともに血も上昇すれば、顔が赤い、眼が赤い、頭痛、吐血などの症状が現れる。逆に気とともに血も下降すれば、腕腹墜脹、下血、崩漏などの症状が現れる。臨床において血行の異常を治療する際に、補気や行気あるいは降気の薬物を配合するのは、気が血をめぐらせるという考え方が基礎にあるためである。

臓腑の気に関しては、血の循環に関わる気の機能に、心気の推动作用の機能、肺気の宣発と散布の機能、肝気の疏泄の機能などがある。

【例】補陽還五湯(黄耆、当帰、赤芍、川芎、紅花、桃仁、地竜)

気の行血作用を応用した方剤に補陽還五湯がある。本剤に配合される大量の黄耆は、気を補って気的作用を旺盛にし、血行を改善させる作用がある。補気活血・通絡の効能をもつ本剤は、気虚血瘀証に用いる代表的方剤である。

3 気は摂血する(摂血)

摂血とは、血を対象とする気の固摂作用である。気の血を固摂する作用が正常であれば、血は脈中を流れ脈外に漏れ出ることはない。もし気が虚弱となり血を固摂する作用が弱まれば、さまざまな出血症状を呈する。これを「気不摂血」という。治療の際は、気を補って摂血する方法を採る。

【例】帰脾湯(黄耆、竜眼肉、人參、白朮、当帰、茯神、酸棗仁、遠志、木香、炙甘草)

気の摂血作用を応用した方剤に帰脾湯がある。補脾益気の効能をもつ黄耆や人參、白朮が配合されており、脾気虚が進行して脾の統血作用が失調した脾不統血証に応用される。

2. 血の気に対する作用

…… 血は気の母

血には、気を載せて運び、気に栄養を供給する働きがある。血には気に対するこのような働きがあるために、「血は気の母」とされる。

気は活力が非常に盛んであるために、単独では身体から脱出しやすい。よって気を体内に留めておくためには、気を何かに附着させる必要がある。もし気が附着するものがなければ、気は浮いて散らばり身体から脱出し気脱となる。気は血に附着し載せられている(図7)。そのために血が不足すれば気も衰えやすく、血が逸脱すれば気も失われやすい。もし大量に出血すれば、気も一緒に体外へ抜け出てしまう。このような病態を「気随血脱」という。治療の際は、益気固脱の方法を採る。